

少女雑誌の部屋から

今月から新しい企画展「乙女のふろく大集合!!」展が始まります。今回は、およそ1,700点の少女雑誌のふろくコレクションの中から、約170点をご紹介します。豊富なバリエーションの紙モノや高機能なハイテク小物などなど、時代とともにデザインや仕様が多彩化、進化していく過程をどうぞご覧くださいませ。もしかしたら、あなたが少女時代に大切にしていたものに出会えるかもしれませんよ♪



雑誌紹介 20

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

なかよし (講談社) 昭和30(1955)年1月号～現在も刊行中

『少女クラブ』の妹雑誌の位置づけで、見て愉しく、気楽に読める雑誌を目指して創刊された。当初は「少女雑誌」ではなく「幼女雑誌」としてスタートした。漫画を含めた少女向け総合読み物雑誌であり、絵物語・グラフ(写真等)・漫画の3つの柱を軸にしていた。また、創刊号から付録が付いており、綴込み付録も種類が豊富だった。昭和33(1958)年頃から漫画をメインとする誌面構成となり、少女漫画雑誌へと移行していった。

現存する講談社発行の幼児および少年・少女向け雑誌の中でも最も古い歴史を持ち、数々の名作や著名な漫画家を輩出している。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 20

鈴木悦郎 (すずき えつろう) 1924—2013

東京・浅草生まれ。本名は一郎。

15歳の時に中原淳一のもとを訪ねたことが縁で、淳一グッズの店「ヒマワリ」で店番を1年ほど務めた。昭和16(1941)年、東京舞台に入社。東京宝塚劇場の舞台芸術の仕事を経て挿絵画家となる。昭和21(1946)年、『少女の友』12月号で、鈴木越郎のペンネームで初めて挿絵を描く。婦人雑誌『ソレイユ』2号では本名の鈴木一郎で描いた。昭和22(1947)年、『ひまわり』創刊号でカットを担当。挿絵画家の仕事に本格的に取り組むために東京舞台を辞職。松本かつぢの紹介で少女雑誌の仕事も増えていく。かつぢの命名でペンネームを「鈴木悦郎」とする。昭和25(1950)年、猪熊弦一郎絵画研究所でデッサンなどの絵画の基礎を学ぶ。その後、絵本、装幀、雑貨デザイン、バレエ美術など幅広い分野で活躍した。

少女雑誌の豆知識

乙女のふろく事情

少女雑誌初のふろくは明治39(1906)年、新年の特別号につけられた双六でした。昭和初期頃まで、ふろくは年に1回、新年号にだけついており、定番は双六でした。その後、次第に頻度が高まり、毎月つくようになりました。出版社間でふろくのアイテム数やバリエーションの豊富さを競いあっていた時期もありましたが、最近は一歩豪華主義の傾向にあり、実用性や機能性を備えた品質のよいものを求める声も多いようです。ふろく事情も時代とともに変化していますね。